

祖父の声とともに

池田高校二年 黒瀬 二二二

「努力に勝る天才無し。」

自分と周りの友達との違いに打ちひしがれていた私に、祖父が言った。祖父の人生を物語ったこの言葉は、私に力を与えてくれた。

私の学校は、文部科学省のスーパーサイエンスハイスクール指定校である。生徒全員、どこかのチームに属し、研究を進める。私は悩みに悩んだ末、桜島の火山ガスから噴火予知を目指す研究チームを希望。どの研究も魅力ある中、この班を選んだ決め手は、桜島への好奇心、そして、火山防災を通して社会に貢献できそうだったからだ。こうして、私の研究生活は幕を開けた。

活動開始の日。初めて開けた理科室の扉。張り詰めた空気、鼻をつく薬品の匂い。これまで当たり前前に理科の授業で使っていた空間とは打って変わって、そこはまるで「研究室」だった。一瞬にして体中が緊張感に包まれ、心のねじがぎゅつと締まる感覚を覚えた。見たこともない実験器具、他のチームよりずっと膨大なデータ量に圧倒された。初めは、器具の名前や実験法を覚えることに必死で、頼まれた仕事をすっぱかしてしまふこともしばしば。そのうえ、毎日、器具の洗いや物に追われ、ポスターやスライド作成も行わなければならない。もともと一度に複数のことをこなすことが苦手な私にとって、これだけの量を一度にやり遂げることは至難の業。高校になって授業も進度が速い。メンバーが自分の仕事を済ませ、早めに帰宅する姿に焦りが募り、余計に集中できなくなっていく。こんなにもうまくこなせない自分を知るほど、自己否定の心の暗闇に落ちていくようになった。と同時に、無性に自分が立ち、涙が止まらなかつた。なぜこの研究を選んだのかを自問自答し続ける毎日が続いた。

そんな折、父が祖母のいる笠沙に家族で行くことを提案してくれた。久しぶりの笠沙。いくら心が軽くなり、胸が躍った。

「お帰り。よく来たね。」

扉の奥から聞こえる。いつもの祖父の声。小さな歩幅でゆつくりと出てきた。

祖父は、俗に言う「黒瀬杜氏」の一人。数十キロもある羊袋や麩を背中に担いできた弟子時代。昼夜問わず、焼酎という一筋縄ではいかない生き物を相手にしてきた苦労話は、何度も聞いた。杜氏としての威厳と誇りに満ち溢れている祖父の目は、背中が曲がった今も変わらない。しばらく、みんなで談笑をしていると、

「こころ、元気がなが。どげんしたとよ。」

祖父は全てを見透かしたかのように、突然私に聞いてきた。私の中にたまっていった研究チームでの苦悩、自分への苛立ちが言葉となってぼろぼろと溢れ出していった。祖父は、私の言葉をうんうんと大きく頷きながら、耳を傾けてくれた。ひとしきり話すと、祖父は急に背中を伸ばし、

「こころは真剣に考えよつが。それは頑張ってる証拠。努力に勝る天才無し。きばれ。」

と、しわだらけの温かい手でポンポンと私の肩を叩きながら言った。「努力に勝る天才無し。」祖父の半生を凝縮したこの言

葉。苦境に負けず、名酒の味を守り続けた杜氏としての言葉の重みに、私の心も定まったようだった。こんな私でも、努力次第で何かを変えられることができるかもしれない。

翌日から、放課後になるといち早く理科室に行き、先生や先輩を質問攻め。仲間とは意見交換をして、考えを深めていった。パソコンは持ち帰り、自分でデータ分析や考察に勤しみ、やれることは全部やった。いつしか、ほぼ全ての先行論文に目を通し、火山ガスの成分分析に没頭したあげく、噴火予知の必要性を家族に熱弁する自分がいた。そんな自分の変化が嬉しく、研究そのものが私の宝物になっていった。

火山は鹿児島県民にとって身近な存在だが、火山ガスの研究は未だに注目されていない。その事実は私の意欲をいやましに掻き立てた。様々な大会に出場し、反省を繰り返す日々の中、ついに高校化学グラウンドコンテストで文部科学大臣賞を受賞、国際大会に出場する機会を得た。その後、研究の精度を上げ、国を問わず一目で理解できる英語ポスターを目指し、語学力も磨いた。そして、ようやく主催国の台湾へ。会場には、世界各国の自信に満ちた同世代が集まった。私たちのブースに次々に訪れる研究者や高校生。説明する声がかかるにつれ、自分たちの研究が国境を越えるような思いがして心が震えた。「火山学の道に進もう。」胸の内から一気に込み上げてきた。

私が進む道は、自然が相手。突き詰めようとするほど困難にぶち当たるだろう。だが、私は諦めない。祖父が不屈の精神で焼酎の味を造り上げたように自分の夢を貫く。「努力に勝る天才無し。」今日も私は理科室で火山と向き合っている。祖父の声と共に――。

(山崎 巧先生指導)

(審査員評) 同じ言葉であっても、だれがその言葉を発しているかでその重みは異なる。筆者の心に響いたのは、まさに「焼酎」という一筋縄ではいかない生き物を相手に「その「味を守り続けた」祖父がかけた「努力に勝る天才無し」という言葉だからこそである。祖父の生き方に励まされ、噴火予知の研究に取り組む筆者の真摯な姿が生きて表現されている。火山と共に暮らす鹿児島県民にとって、筆者の研究がいつか実を結んでくれることを願ってやまない。

「祖父の声とともに」について

池田高校 山崎 巧

論理をバラグラフとして学ぶ本校授業「logic」の一環として作成させた作品。本人は中学時よりプレゼンテーションがうまく、提出させた文章もその語り口に似てみずみずしく、華があった。題材はより高いレベルの探究を目指す心的葛藤。当初、本論の具体例と考察に冗長な部分があり、簡単な助言と本人の修正を三〜四回ほど行い、本人が納得した時点で脱稿。引き締まった文体に仕上がった。文章の勢いを生かす指導に留意した。